

宇宙原理による宇宙の姿

－ 4 大変化、宇宙の生と死－

現在普及している宇宙論では、宇宙の始まりにおいて急膨張やビッグバンと言われる現象が起きたと考えられている。宇宙原理では、宇宙は大変化によって生まれたと考える。宇宙は宇宙原理のもとで生まれたという推理を立ててみる。

天体の質量(重力)が大きくなり、光をも閉じ込めるようになったとき、ある偶然からその天体に大変化が起きる。それは爆発ではなく、天体自身の内部変化である。天体を形成する固体と液体が一瞬に気化する。この物理的現象(素粒子の水準)は天体の内部の相の大きな変化といえる。この大変化は、現在普及しているビッグバンに対比できる。

この大変化で光が走る環境が整ったとき、新しい(子)宇宙が誕生する。前天体が属していた宇宙は、新しい宇宙の親宇宙になる。

新しい宇宙の中の光は壁によって閉じ込められる。発した光は壁に到達する事は出来ない。新しい宇宙の大きさは、内部を移動する光によって測られ、無限大となる。一方、親宇宙から見れば大きさは元の天体と変わらず有限となる。急膨張はない。有限から無限への変化は尺度の変化による。

こうして、宇宙の親子関係が形成される。更に、親には親を、子には子を認めることができる。宇宙原理は宇宙全域に通じる。親宇宙も上と同じ過程で形成されている。この過程は宇宙の全ての世代に共通である。

宇宙が光を閉じ込める能力を失ったとき、宇宙は死に、親宇宙の中の一般の天体に戻る。その子宇宙も道連れにされる。親宇宙が死ねば子宇宙も死ぬ。